

理学部オープンキャンパス 2014 報告

オープンキャンパス実行委員長 志甫 淳
(数理科学研究科数理科学専攻 教授 数学科兼任)

今年のオープンキャンパスは昨年
にひきつづき全学的に2日間の開催
であり、2014年8月6日(水)、7日(木)
に行われた。理学部では、初日は午後
のみのプレオープンとして講演会を
中心とした開催とし、2日目はメ
イン開催日として、講演会および
各学科の展示、ラボツアーが行わ
れた。猛暑の中のオープンキャン
パスであったが、理学部1号館ピ
ロティは多くの来場者の方で溢れ
ていた(図1)。最終的な来場者数
は1日目が1794人、2日目が3554
人であった。こ



図1:理学部1号館ピロティに集まる来場者の方々

れは昨年とほぼ同じくらい
であり、教員や学生と直接
触れ合う貴重な機会である
オープンキャンパスに対す
る興味の大きさがうかがえ
る。関東圏以外からの来場
者もかなりいるようであり、
東大のオープンキャンパス
はもはや全国的な行事のひ
とつとなっているのかも知
れない。ホットピンク色のT

シャツを着たスタッフとTAの学生たちが、
効率よく受付、誘導、案内を行っていた。

「学生による小柴ホール講演会」では、
数理科学研究科、物理学専攻、地球惑星
科学専攻の院生による講演が行われた
(図2)。どの講演も、研究室の様子や自
らの研究についてわかりやすく高校生に

伝えており、たいへん立派な
ものであった。興味をもった
高校生が講演後、講演者に質
問をするために列をなす光景
も見られた。また、「教員に
よる小柴ホール講演会 学科・
学部はどうやって選ぶ?理学
部にしかできないこと」では、
生物科学専攻、情報理工学研
究科、化学専攻の教員による



図2:小柴ホール講演会にて挨拶する五神真研究科長

自らの研究や学科の魅力についての講演
があり、やはりたいへん素晴らしいもの
であった。また、小柴ホールホワイエ
では「リガクル♡ミラクル<女子中高生
のための相談コーナー>」が例年通り開
催され、女子学生が女子中高生の相談
に熱心に対応していた。

筆者は普段駒場キャンパスにおり、横
山広美准教授、菅原栄子さんを始めと
する広報室の皆様のご多大なご助力が
なければオープンキャンパスの開催は
不可能であった。ここに深く感謝申し
上げる。また大西淳彦事務部長を始め
とする理学部事務および情報システム
チームの皆様、実行委員の皆様そし
てTAとして手伝っていただいた学生
の皆様にも深く感謝を申し上げます。

理学部イメージコンテスト 2014 優秀作品

オープンキャンパス実行委員長 志甫 淳
(数理科学研究科数理科学専攻 教授 数学科兼任)

オープンキャンパスの開催に合
わせ、今年も理学部イメージコン
テストが2014年8月6日(水)、7日(木)
に理学部1号館サイエンスギャラ
リーに展示される形で開催され
た。今年は当初、応募数が少な
く開催が危ぶまれたが、最

終的には「研究データ部門」、
「研究生活部門」合わせて昨年
と同数の14作品の応募があ
った。忙しい中応募してくれ
た教員、学生の皆様に深く感
謝を申し上げます。来場者、
スタッフ、関係者による投票
の結果、以下の3作品が最優
秀賞・優秀賞に選ばれた。研
究の中で良い写真を撮影する
機会のある方は「研究データ
部門」へ、そうでない方は
「研究生活部門」へ、という
ことでぜひ来年はより多くの
応募をお願いしたい。(作品
と応募者コメントは裏表紙を
参照)

最優秀賞 研究データ部門
河野俊丈 (数理科学研究科 教授)
「折り紙による双曲面の模型」

優秀賞 研究データ部門
相馬達也 (物理学専攻 博士課程2年)
「電波受信中」

優秀賞 研究データ部門
三河内岳 (地球惑星科学専攻 准教授)
「鉱物のカタチ」

2014 高校生のための夏休み講座報告

■ 横山 広美 (科学コミュニケーション 准教授)

6回目の開催となった高校生講座は、2014年7月23、24日、8月20、21日の4日間にわたり計8名の教員が講演を行い無事に終了した。どの回にも100名近い生徒が集まり盛況だった。高校生講座と銘打ってはいるが今回も中学生の参加が多く、また、海外から一時帰国で日本に滞在中、参加する生徒も数名おり、一部の質疑は英語で行われた。

今回はとくに、二人の助教の先生の講義が特徴的だったので紹介する。天文学専攻附属天文学教育研究センターの田村陽一助教による講義「目には見えない宇宙をさぐる」は、美しい映像とアニメーションを

駆使したものだった。また、電波望遠鏡の原理を理解するのに、2人の生徒に目をつぶって手をつなぎ、檯上に立って「望遠鏡」になってもらい、電波がどの方向から来たのかをあてるゲームをした。この実験はわかりにくい電波望遠鏡の仕組みをわかりやすく伝えるのにとっても優れており、多くの参加者が納得したようだった。

また、物理学専攻の高山あかり助教による講義「見えないものを見る～異常感知能力を鍛えて電子の世界を覗く～」は、異常感知能力というキーワードに注目が集まった。これは言葉で、いつもと違う何かを五感で感じる事が実験には重要という内容に、多くの生徒が実験の面白さを感じたようだった。

他の講義もいずれも好評で、今年度からは冬休みにも開講を予定している。ご協力をいただいた教員の皆様に感謝したい。



■ 2014 高校生のための夏休み講座ポスター

東大理学部で考える女子中高生の未来 2014

男女共同参画委員長

小澤 岳昌 (化学専攻 教授)

女子中高生に理学部の魅力を伝えるイベントの一貫として、「東大理学部で考える女子中高生の未来」が2014年8月29日(金)午後1時から開催された。ホームページやポスターを通じて参加事前登録をしていただき、当日は中学生24名、高校生16名、ご父母27名にお越しいただいた。

はじめに、本企画の趣旨ならびに理学部の取り組みについて、小澤男女共同参画委員長が紹介した後、数理科学研究科の石井志保子教授、地球惑星科学専攻の並木敦子助教、大鵬薬品工業株式会社勤務(化学専攻卒業)の古田亜希子様に、

各々の研究内容に加え、研究者になった経緯や研究生生活などについてご講演いただいた。

講演後は、今年は趣向を変えて、参加いただいた学生に疑問に思うことや知りたいことについて作文をしていただいた。その後3グループに分かれ、ご講演された3名の先生方に作文を読んでいただき、学生一人一人の疑問に率直な意見を交え丁寧にお答えいただいた。質問内容は進路に関する相談や、プレゼンテーションポスターを上手に作製するための方法、また働きながら子育てすることへの不安など、学年に応じて様々であった。

最後にご父母を交えた全体討論を行い閉会となった。

理科に興味をもちながらも進路や将来に不安を感じる学生は少なくなく、そのような偏見を払拭するためには、父母を交えたイベントが効果を発揮する。はじめは緊張した面持ちの学生が、終了時には瞳を輝かせていた表情が印象的であった。



■ 当日の様子

「高い研究倫理の精神風土」を保つために —「研究倫理」講義の新規開設—

■ 教務委員長 久保 健雄 (生物科学専攻 教授)

昨今、研究不正が大きな社会問題となっている。残念ながら東京大学も例外ではない。本研究科・学部では「高い研究倫理の精神風土」を維持し、研究不正の発生を未然に防止する目的で、全学に先駆けて今年度(2014年)から学部・大学院共通講義「研究倫理」を開講することとした。

今年度は本研究科・学部属する全学生(約2,000人)を対象とした選択科目(1単位)とするが、来年度からは新入生

(約900人)を対象とした必修科目とする予定である。「研究倫理」講義の開設は次の手順で行った。まず従来、大学院講義「研究倫理」を担当されてきた横山広美准教授(科学コミュニケーション/広報室副室長)から教材をご提供いただき、これを教務委員会・教育推進委員会での検討を経て、両委員会監修教材とさせていただきます。次いで横山准教授に講師をお願いし、この教材を利用して、本研究科・学部専任教員(約300人)を対象としたファカルティ・ディベロプメント(FD)を実施した。FDの場でさらに講義の内容と在り方についての議論を行い、各学科・専攻において講義を行う際に利用する「共通教材」を作成した。これをFDを受講した一部の教員に配布

し、各学科・専攻での学部・大学院生を対象とした「研究倫理」講義にご利用いただくこととした。

本講義は5コマからなる集中講義であり、最初の2コマでは上記の「共通教材」を用いた講義、3コマ目では各学科・専攻で独自の研究倫理講義を実施する。4コマ目は学生相談室のスタッフによる「ハラスメント」講義、最後の5コマ目が試験である。最初の講義は天文学科・天文学専攻で7月25日(金)に開講され、以降順次、各学科・専攻で開講される。冬学期には英語による授業も開講予定である。本講義が「高い研究倫理の精神風土」の維持・育成に役立つことを心から願っている。

NHKEテレ2355で放映された おやすみソング「小石川植物園 に行ってみました」

■ 植物園長 邑田 仁 (生物科学専攻 教授)

さわがしい1日がおわり、ねる前に無心にかえって床についたらどんなにいいだろうか。そんなときにふと思いかべる風景はなつかしいものにちがいない。

私がまだ学生として小石川植物園で勉強していたころ、駅で開かれていた古本市で「植物園」という副題のついた「少年世界」定期増刊(1902年(明治35年)発行)をみつけた。なぜかなつかしい思いがして購入したが、その後小石川植物園に勤務するようになる啓示であったかもしれない。この本には谷活東により「植物園案内記」として小石川植物園が取り上げられ、正門から日本庭園を経て園内を一周する案内が書か

れている。23時55分から放映されたおやすみソング「小石川植物園に行ってみました」を聴いた時、真っ先に思い出したのがこれである。ソテツの坂、イロハモミジ、独特の形状の温室、メダカが起こすちいさな波紋。ここで発見されている要素は明治の小石川植物園と何も変わっていない。そしてどちらにも「研究

のための植物園」であることが明記されている。「研究のためのしずかな植物園」で輝かしい研究が行われてきたのだ。世の中の人々にとって、また研究者にとって小石川植物園はまぎれもない原風景である。(関連記事は学内広報参照 <http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1456/pdf/1456.pdf>)



「植物園」坂の図



「植物園」カミガヤツリ